宇治拾遺物語

絵仏師良秀　―　現代語訳　―

これも昔のことだが、絵仏師の良秀という者がいたということだ。（ある日のこと、良秀の）家の隣から火事が起こって、風が上から吹きつけて、（火が）迫ってきたので、（良秀は、家から）逃げ出して、大路に出てしまった。（家の中には、）人が（注文して）書かせている仏（の画像）もいらっしゃった。また、（寝たときのままで）衣服を着ていない妻や子なども、そのまま中にいた。（良秀は、）そんなことも気付かず、ただ（自分が）逃げ出したのをよいことに、（大路の）向こう側に立っていた。

見ていると、（火は）すでに自分の家に移って、煙や炎がくすぶ（ってきたが、そうな）るまで、ほとんど全てを、向かい側に立って眺めていたので、「たいへんなことですね。」と言って、人々が見舞いに来たけれども、（良秀は）落ち着いていた。「どうしたのですか。」と、人が言ったところ、（良秀は、家の）向かいに立って、家が焼けるのを見て、うなずいては、時々笑うのだった。（そして、）「ああ、大変なもうけものをしたなあ。長い間、（自分は、不動尊の火炎を）下手に書いていたもんだなあ。」と言った（が、その）ときには、見舞いに来た人たちは、「これは、いったいどうして、このように立っていらっしゃるのですか。あきれたことですよ。何かが取りついておいでなのですか。」と言ったところ、（良秀は）「なんだって、何かが取りつくものか。長年、不動尊像の火炎を下手に書いていたのだよ。今（本物の火炎を）見ると、こんなふうに燃えるのだと、悟ったのだ。これこそが、（私にとっての）もうけものよ。この（仏画の）道を専門にして世にあるとしたら、仏様さえ上手にお書き申したならば、百でも千でも家は出来るだろう。おまえさんたちこそ、これといった才能もお持ちではないのだから、物なんかを惜しみなさるがよい。」と言って、あざ笑いながら（そこに）立っていた。

その後のことであろうか、良秀のよじり不動と呼んで、（良秀の描いた不動尊の画像を）今でも、人々は皆褒めたたえている。